写真は、那須野が原の大パノラマの中に佇む松方別邸（千本松）

# 那須野が原開拓浪漫譚（ろまんたん）

広大な那須野が原の緑のじゅうたんの中にひっそりと建つ一軒の邸宅。明治36年に建てられた優雅な洋館は、時の流れが止まったかのような静寂の中に佇んでいる。なぜ100年以上も前の時代に、この地に建てられたのか。その疑問に答えるために、日本遺産に登録されたこの地域の歴史を少し紐（ひも）解いていきたい。

八溝のさらに奥から朝日が顔を出し、雑木林の鳥たちがさえずりはじめる。那須連山は今日も青く、まばゆい光が反射する田んぼでは稲がすくすくと背を伸ばす。秋には、黄金色の稲穂のじゅうたんが一面に広がることだろう。ここは、恵みの大地・那須野が原。かつて、不毛の原野であった面影は、その景色からは感じられない。

しかし、少し周りを見渡すと、地表を水が流れぬ川。掘れども掘れども石。冬にはその石をも飛ばすほど強い北風が吹き荒れる。広さ約４万ヘクタールにも及び、長らく人々を拒み続けてきた日本最大の扇状地の姿が顔をのぞかせる。

明治という新たな歴史の幕開けとともに、この地に差し込んだ新たな光。明治政府の中枢にあった貴族階級は、この地に私財を投じ大規模農場の経営に乗り出した。近代国家建設の情熱と西欧貴族への憧れを胸に荒野の開拓に挑んだ貴族たち。その遺志は長い闘いを経て、那須連山を背景に広がる豊饒（ほうじょう）の大地として実を結んだ。那須野が原に今も残る華族農場の別邸を訪ねると、近代日本黎（れい）明期の熱気と、それを先導した明治貴族たちの足跡を垣間見ることができる。

今年の5月。明治貴族による開拓にまつわるストーリー「明治貴族が描いた未来～那須野が原開拓浪漫譚～」が日本遺産に認定された。日本遺産とは、地域に点在する文化財をつなぎ合わせ、日本の文化や伝統を物語る「ストーリー」を文化庁が認定し、地域活性化を図るもの。いわばこの地域の歴史の価値にお墨付きが与えられたのだ。日本遺産としての認定を機に、注目を浴びる那須野が原の開拓史。住んでいても意外と知らない物語のページを少しめくってみよう。



JAPAN HERITAGE
日本遺産

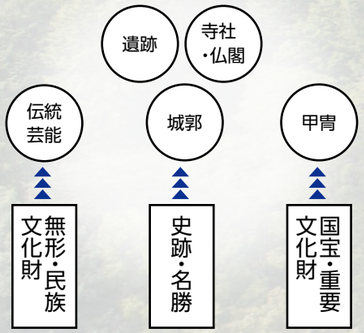
## 日本遺産とは…

東京五輪・パラリンピックまでに全国で約100件まで増やそうとするもので、文化財を「点」として捉え、主に保存を重視するこれまでの文化財指定の制度と性格が異なり、地域に点在する遺産を「面」として一体的に捉え、活用することが重視されている。

本市と大田原市、矢板市、那須町が共同で申請し、明治期に華族が那須野が原に大規模農場を経営した歴史を核とする物語（ストーリー）が認定された。昨年は落選し苦杯をなめたが、2度目の申請で認定を勝ち得た形だ。今年の５月に日本遺産に登録されたのは全国で13件。第4弾となる今回を含め、全国で67件の物語が認定されたこととなる。

**従来の文化財行政**

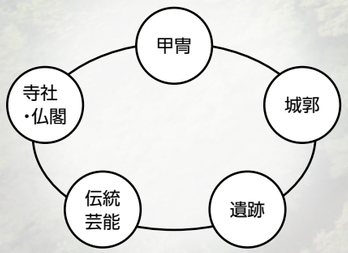
個々の遺産を「点」として指定・保存




「保存重視」➡地域の魅力が十分に伝わらない

**日本遺産**

点在する遺産を「面」として活用・発信




「活用重視」➡パッケージ化した文化財群を一体的にPR